

20歳を過ぎた頃、車の免許を取った。孤立した箱の中に座り、自分の意思で軽々と操る。スピード感と共に次々と現れるパノラマ。その痛快さは、ミステリアスであった。

初の自分の車は32歳の時。1972年製セダンの

フォルクスワーゲン タイプ4。中古だが一目見てぞっこだった。緩やかに丸みを帯びたラインのおっとりフォルム。色はお洒落な

灰クリーム。左ハンドルで、ギアノブは床から突き出た鉄の棒1本。飾り気ないシンプルボディで、空冷のリアエンジンをバタバタ響かせ、満悦で疾走した。

世界を席巻したのはタイプ1の大衆車ビートルだが、タイプ4はハイクラスでほとんど日本に入っていない。12年余り乗ったが、

地方では古い外車の維持は難しく、泣く泣く手放すことに。たまたま雑誌で見つけた、東京に住む超ワゲンマニアの青年に連絡すると、歓喜してすぐ宇和島まで受け取りに来た。その後、幻の車として写真が載った本が彼から届いた。

次に乗ったのが1986年製セダン、シルバーマタ

車

ルのボルボ240GL。親しかった画商から譲ってもらった。量感たっぷりちよっと厳つい角張ったボディ。ボルボらしい力強い

意匠は、このモデルが最後だったと思う。絵を運ぶ安

全性から頑丈なこの車に乗る画商が多く、銀座を歩く

も疎い僕が、この2台にうまく出会ったがために、中古とはいえ分不相応な外車に20年以上も乗り続けた。だがそれは故障との闘いでもあり、痛い目にも度々あったが、強い愛着でめげることはなかった。

しかし一方で、次第に大



きな車に乗ることに後ろめたさを感じるようにもなっていたのだ。ガソリンを大量に食い、排ガスを撒き散らし、地球壊しに加担する。

それに車は元々凶器だ。事故による死者は年間100万人を超え、世界大戦を毎年しているようなもの。そ

れでもなお功罪相償うで走り続ける。

そんなモヤモヤ感から、15年前に国産のコンパクトカーに替え今も乗っているが、自分へのカムフラージュに過ぎないのだろう。ただ驚いたのは前の2台との違い。運転する臨場感などなく、小指1本で動かせるような高性能の玩具に車は変身し、物としてのたしかな質感は失せていた。

そして今、なんだかんだ言いながらもあと10年、最後の一台をと思ったりする。しかし見渡すと、せこせこしたスタイルばかり。ほしい車がない。困った。

それでも、地球を壊さず人を殺さない車には向かっているのだろう。まさに車の大転換期。さて、その進化はいかに。

(吉田 淳治・画家)